善光寺隣に登場した「ランドスケープ・ミュージアム」

長野市の善光寺の東隣に今年春、新名所ができた。2017年まであった「長野県信濃美術館」が全面的に建て替えられ、「長野県立美術館」となって開館したのである。信濃美術館の時代から、日本画家・東山魁夷（1908～1999年）の作品を多く収蔵することで県外の方にも良く知られる場所だが、新しい美術館からの眺めは地元に住む人々にとっても新鮮で、この街が善光寺を中心に作られてきたことを改めて感じさせてくれるのだ。

城山公園の一角に立つこの建物のコンセプトは「ランドスケープ・ミュージアム」。設計者の宮崎浩氏は「建物が突出することなく、風景の一部となるよう、ランドスケープと建築を一体的に計画した」と話す。その所産が、この新たな眺めだ。

美術館でありながら、無料で利用できる部分が多いのも、この施設の特徴だ。例えば、館の屋上部分にある「風テラス」。板敷きの広いテラスになっており、最も眺めが良い。あるいは、中庭の「霧の彫刻」。アーティスト・中谷芙二子の作品で、水辺の周囲に設けたノズルから吹き出す霧が、風の動きで姿を変え、光の加減で色を変える。また、本館の周囲はガラス張りのため、通路を歩くと、美術館というよりは公園内にいるように感じる。

ところで、城山公園という場所は、地元の住民が多く利用する公園でもある。善光寺にももちろん行くのだが、一帯は桜の名所だし、近くに動物園があったりして、より日常的なのだ。その意味で、新しい美術館は、地元の人々と観光客が触れ合う場所になり得る。

2022年春、当初予定から１年延期となった善光寺御開帳が行われる。同じ時期には諏訪地方で諏訪大社の「御柱祭」がある。県南の飯田市では「お練り祭り」も。ともに７年目に一度の盛儀が重なる「お祭りイヤー」を迎える信州。その時、県立美術館の「風テラス」で、善光寺への参拝を終えた観光客に、地元の人が「長野の街はね…」などと説明する姿が見られたらいい。コロナ禍の一日も早い終息を願わずにはいられない。

信濃毎日新聞社 広告局企画部長　豊田 幸司

（外観）長野県立美術館の外観。壁面はガラス張りで、館内にいても公園の中にいるように感じる

（風テラス）屋上の「風テラス」では、真正面に善光寺本堂が見え、その周囲に街が広がる様子が分かる

（霧の彫刻）中庭の「霧の彫刻」は、風や太陽光によって姿や色を変える